「私のものではない言葉」
—『名づけえぬもの』試論—[1]

石　川　太　郎

序

本論では、*The Unnamable* という作品を主に扱う。この作品は、Samuel Becketttのキャリアにおける、一つのピークを表す傑作として様々な批評家達に位置付けられている[2]。つまり、Becketttについて語る時には避けては通れない重要な作品の一つとなっている。作品のテーマの一つに、唯一の登場人物である語り手と、語る声の問題がある。語り手は、喋っているのは自分ではなく、自分はここにいないと繰り返す。しかしながら、この作品には語り手しか登場しないのだから、喋っているのは明らかに語り手だ。さらに、自分はここ（テクスト内）にいないと言いながら、英語版で一七六ページに渡って延々と独白を続ける語り手は、テクスト内で強烈な存在感がある。つまりここでは、声を語る事と、声を発する事で保証される語り手の存在の関係が大きな問題となっているのだ。そこで、本論では、*The Unnamable*[3] という作品の分析を通じて、何が原因で、語り手と声との間に食い違いが生じているかを検討して行く。その結果として、何故Becketttは*The Unnamable*のような作品を書かねばならなかったのかという問いに対する答えを出来る限り提示するのが本論の目的だ。

まずは*The Unnamable*という作品の簡単な説明と、何が問題になっているのかという点を早速以下に見て行こう。

1：アポリア

Samuel Beckettは*The Unnamable*をまず始めにフランス語で書き一九五三年に出版した。その後自ら英訳して五年後の一九五八年に英語版を出版した。作品内容を簡単に要約するのは非常に難しい。しかし敢えてやってみれば以下の様になる。登場人物は語り手一人だ。語り手は自分が置かれている場所が何処だか分らない。ある薄暗がりの場所に自分は居ると言うが、完全な暗闇ではなく、時々薄く明かりが差して来る。この明かりもやがて消え去るが、完全に真っ暗ではなく、むしろ自分の周りは全て灰色なのではないかと語り手は自問自答する。結局、語り手が何処に居るのかは最後まで分らない。要するに、自分はどこかに居るのは分っているが、それが何処なのか分らない。全てが何かであるようで、何でも無いかも知れない。この様に全てが曖昧な状況で話が進む。今、話が進むと述べたが、その話を進めるべき言葉とその言葉を語っているのは誰かという事が一番問題にされる。*The Unnamable* 最初のパラグラフの一部である以下の引用を見てみよう。

> I seem to speak, it is not I, about me, it is not about me. These few general remarks to begin with. What am I to do, what shall I do, what should I do, in my situation, how proceed ? By aporia pure and simple ? Or by affirmations and negations invalidated as uttered, or sooner or later ? Generally speaking. There must be other shifts. Otherwise it would be quite hopeless. But it is quite hopeless. I should mention before going any further, any further on, that I say aporia without knowing what it means. Can one be ephectic otherwise than unawares ? I don't know.
>
> (*The Unnamable* 3-4)

> J'ai l'air de parler, ce n'est pas moi, de moi, ce n'est pas de moi. Ces quelque généralizations pour commencer. Comment faire, comment vais-je faire, que dois-je faire, dans la situation où je suis, comment

procéder ? Par pure aporie ou bien par affirmations et negations infirmées au fur et à mesure, ou tôt ou tard. Cela d'une façon générale. Il doit y avoir d'autre biais. Sinon ce serait à désespérer de tout. Mais c" est à désespérer de tout. A remarquer, avant d'aller plus loin, de l' avant, que je dis aporie sans savoir ce que ça veut dire. Peut-on être éphectique autrement qu' à son insu ? Je ne sais pas.

(*L'innomable* 7-8)

言葉を語っているはずの語り手が、この言葉を語っているのは自分ではないと言っている。ここで問題なのは語られるべき物語ばかりではない。語りの主体であるべき「私」の存在自体が問題にされている。さらには言葉を語っている「私」から言葉そのものに問題は拡大されてゆく。この様な状況は最後まで続く。語っているのは私ではないと言いながら、「私は言っておかなければならない」(“I should mention”) と語る語り手は、まさに今挙げた引用箇所をそのまま具体化した存在であると言って良い。

David Lodgeによると、語り手が述べているアポリア (aporia / aporie)とは、元々はアリストテレスが作り出した哲学用語で、①2つの相矛盾する正しい見解のどちらかを選ぶ時の困難さ。②解決困難な問題・難問。を指す (*The Art of Fiction* 219 - 20)。また「判断停止」という意味の“ephectic”も古代ギリシアの懐疑学派の哲学者が生み出した言葉で、判断を下す事を控える事で物事の価値を宙吊りにする事を意味する。アポリアの考えに従えば、語り手は自分が喋っているつもりは無いと言うが、喋っているのは自分しかいない。私は喋っていないという事を私は言わなければならない、それでは結局自分が喋っているという事になるのではないか？ということになり、一体どちらの見解が正しいのかという事になる。また、“ephectic”(判断停止) という言葉の定義に従えば、「人は無意識になる事無しに判断停止状態になれるのだろうか。」と述べながら、語り手自身が無意識状態になる事無く自分についての判断停止状態に陥っている。つまり、一体自分は語っているのだろうか？私には判らない。決められない。という状況だ。この様な大いなる堂堂巡りに加えて、語り手は「どうやって物語を先に進めるのだ？」と問いを立てながら、その問い自体を作品の一部として組み込みながら話を進めて行く。今、進めて行くと述べたが、問題は何一つ解決しないので、読者としては、ページは進むが、話の内容は全

く進まない。まさに悪夢の様な矛盾と悪循環そのものとも言うべき状況だ。そこで、早速以下にこの悪循環が生じる理由を見て行こう。

2：言葉の役割

*The Unnamable*中で語り手は、自分はかつてMurphy、Molloy、Maloneその他諸々の名前に自分を重ねて語って来たが、それは必ずしも成功だったとは言い難く、今こそ自分について自分の物語を語る時であると自覚している。つまり、自分の事を第三者に仮託して話すのはもうイヤなのだ、と言っているのだ[4]。しかし、自分の物語を語る時は最後までやって来ない。さらに、「私」という一人称単数形でさえ、まるで三人称の様に扱い語りを続けようとする。以下の引用を見てみよう：

> (a) It all boils down to a question of words, I must not forget this, I have not forgotten it. But I must have said this before, since I say it now. I have to speak in a certain way, with warmth perhaps, all is possible, first of the creature I am not, as if I were he, and then, as if I were he, of the creature I am. Before I can etc. It's a question of voices, of voices to keep going, in the right manner, when they stop, on purpose, to put me to the test, as now the one whose burden is roughly to the effect that I am alive.
>
> (*The Unnamable* 66)

> (a) Tout se ramène à une affaire de paroles, il ne faut pas l'oublier, je ne l'ai pas oublié. J'ai dû le dire, puisque je le dis. J'ai à parler d'une certain façon, avec chaleur peut-être, tout est possible, d'abord de celui que je ne sui pas, comme si j'etais lui, ensuite, comme si si j'etais lui, de celui que je sui. Avant de pouvoir etc. C'est une question de voix, de voix à prolonger, de la bonne manière quand elles s'arrêtent, exprès, pour m'éprouver, comme en ce moment celle qui veut, d'une façon générale, que je sois en vie.
>
> (*L'innomable* 81)

(b) The one ignorant of himself and silent, ignorant of his silence and silent, who could not be and gave up trying. Who crouches in their midst who see themselves in him and in their eyes stares his unchanging stare.

(*The Unnamable* 83)

(b) Celui qui s'ignore et se tait, ce qu'ignorant il tait, et n'ayant pu être ne s'y efforce plus. Qui s'entoure de qui s'y reconnaît et lui renvoie la même grimace que toujours.

(*L'innomable* 100)

引用（a）において重要な点は、とにかく「私」とは他の名前でも良く、人間でさえない物の名前でも良いから、第三者の存在に自分を仮託しなければ自分が生きている事が証明できないと述べている点だ。言葉や物語は語り手にとって、言わば、むき出しの現実から自分を守ってくれる防壁の様な物として必要とされているのだ。その意味では、一人称であろうと三人称であろうと大差は無いようだ。語り手が述べている様に、「結局全ては言葉の問題に行き着く」のだから。

引用（b）は自分をまさに三人称“the one”で語っている例だ。「彼ら」とは、先に述べた三人称で表された登場人物達および自分が語っている「言葉」(words) を指している。語り手と言葉の間に、まさに合わせ鏡の世界とも言うべき世界が描かれている。英語版では「彼らの中にうずくまり」と書かれてあるが、フランス語版では「そこ（語り手）を通じて自分を認識する者に囲まれている」となっている。語り手は第三者的キャラクターや自分が語る言葉の中に自分を、まさに反映させる事で自分の存在を見出している。語り手の存在は、自分が作り出すキャラクターの数だけ、そして自分が語る言葉の数だけ存在し、またそれら言葉によって相対的に自らの存在が確認されている。語り手も言葉も、確たる存在を持たず、お互いを映し出す鏡によって、フランス語版の表現を使えば「反射」されている限りにおいて、自らの存在は確認されるのだ。つまり、語り手は、自分を映してくれる言葉無しには自分の存在を確認する事が出来ない。自分の存在を語って証明する事が出来ないのだ。

Hugh Kenner以降様々な形で論じられてきたが、語り手を囲む言葉の様に、何かに囲まれている語り手の状況は、有名なDescartesの“Cogito, ergo sum. =

I think, therefore I am." を批判的にパロディ化した部分であると考えられている（ *A Critical Study* 129－30）[5]。Hugh Kennerに倣えば、外界から閉ざされ、肥大しすぎた思考によって言葉の世界に閉じ込められた語り手の自意識は矮小化され、それに伴いもはや肉体は、外の世界と自意識とを分ける仕切りや区切りとしてあるだけだ。

Descartesは移り変わる自然に対して疑問を投げかけている自意識を、「思考する実体」としての「私」として確立し、自己の存在基盤を築いのだった（*Discours de la methode* 108-22）。その結果、自然や肉体から切り離された知性は言葉を使って自らを体系化し、物事を客観的に分類し、秩序付ける術を手に入れたのだった。そのように現実から離れて頭でっかちになった知性を皮肉っているのが*The Unnamable*という作品の特徴の一部を成しているのは事実であろう。しかし、Hugh Kennerの考えだけではまだ不十分だ。なぜなら、*The Unnamable*の語り手は、Descartesにとって疑い得ない自意識自体も疑いの対象として相対化しているのだ。そこで、次に語り手の分裂という点を、Descartesが打ち出した「コギト」の孕む問題点を踏まえながら考えてみよう。

3：自分が話すのを聞く事

*The Unnamable*という作品は、第一章の引用で見たような「私はしゃべっているようだが、これは私じゃない、私についてではない。」という矛盾に貫かれた作品である事は既に述べた。さらに付け加えると、この作品のタイトルが、語り手が置かれた矛盾を見事に言い表している。すなわち、「名づける事が出来ないもの」（The Unnamable / L'innomable）という名前がちゃんと付けられているのだ[6]。名づけられない、という名前が付けられている事、語っているのは私ではないと私が語る事、これらをまとめると、言葉を発する事が、その言葉が表している内容を裏切っている状態であるとまとめる事が出来る。*The Unnamable*においては、この様な、「言葉を発する事」と「言われている内容」の矛盾が、Descartesの打ち出した「コギト」という概念の孕む問題点と大きく関係している。

Descartesは*Discours de la methode*（1637）において、"Cogito, ergo sum." という考えを自らの哲学の第一原理として打ち出した後、*Meditation metaphysiques*（ラテン語版1641、仏語版1647）中の第二省察において再び取り上げ、発展させ、決して「打ち消す事が出来ない」（indissociablement）個人の本

質・実体として一人称単数の「私」を位置付けている。以下の引用は第二省察の一部だ。

> De sorte qu'aprés y avoir bien pensé, et avoir soigneusement examine toutes choses, enfin il faut conclure, et tenir poru constant que cette proposition : *Je suis, j'existe*, est nécessairement vraie, toutes les fois que je la prononce, ou que je la conçois en mon esprit.
>
> (*Meditation metaphysiques* 73)[7]

この引用部分の前の箇所でDescartesは、もし自分が、自分の存在や、神の存在を疑い、その疑問に対して導き出した答えで、もしも自分が間違っていたらどうなるか？などと一連の問いを出した後で、たとえ間違っていたとしても、その様に問いを発している自分の存在は疑えない、間違いが無いものだとして、引用箇所の結論に至る。ここで重要な点は引用強調部分にある様に、語り手の「私」が存在しているという事は、「私は在る」という考えを私が声に出す（"prononcer"）もしくは、心に思う限りにおいて証明される、と限定されているという点だ。ただ考えるだけではなく、声に出し、言葉にする限りでこの考えは有効であるとDescartes自身によってハッキリと規定されている。この引用箇所について、Daniel Katzは以下の様にコメントしている：

> [I]f it is only the fact of my thinking that proves my being, in order to prove that I am, I must prove that I think, and I must prove that I think precisely by thinking, by producing an *act* of thinking. In Descartes, this act is portrayed as necessarily linguistic... In the Cartesian system, certitude comes from the capacity to *recognize that one has thought*, to think one's own thinking in a movement of linguistic temporality. ...Consciousness, for Descartes, consists of speaking, of *producing* language.
>
> (*Saying I no more* 85-6)

「自分が在る」と証明するためには、まず「自分は考えている」と証明しなければならない。「自分は考えている」と証明するためには、「考える」という行為を行わなければならない。「考える」という行為とはすなわち、「私は考えて

いる」と言葉にして語るなり、心に抱くなりしなければならない。Descartesが存在基盤とした「考えている私」が、単に言語的・時間的に拘束された行為の一つとなっている。時間的と述べたが、つまり言葉を発する事と自分が発した言葉を自分で聞いて認識する事が同時に行われなければならない。語る事とは、ただ言葉を喋るだけではなく、自分の出している言葉を聞く事でもあるのだ。時間的という事は、語る事と聞く事が同時に行われるという事を指す。この同時性が、語りの主体を成立させる重要な役割を担っている。絶対的な自己の存在基盤の「考えている私」は相対化され、言葉を発している自分とそれを聞いて認識する自分が同時にある限り有効な事実の一つの状態に過ぎなくなっている。

「コギト」の相対性を指摘した後、さらに、Daniel KatzはDescartesの「コギト」とは、「われ思う、故に我あり」ではなくて、「我語る、故に我あり」であると、完全にではないが、ある程度までは言えるのではないか、と述べている。そしてさらに、Beckettにおいては、「我語る」ではなくて、「我聞く、故に我あり」であると述べている（*Saying I no more* 86）。このBeckettに関するコメントは以下の様にまとめる事が出来る。「語る私」は語っているのは私ではない、と語るが、「聞く私」に聞こえてくるのはまさに自分の声でしかない。両者の間にはズレが生じている。つまり、語る行為と聞く行為の同時遂行は失敗に終わる。

一見Descartesの「コギト」の手法を用いている様でいて、*The Unnamable*の語り手はDescartesの「コギト」が孕む不確実性を鋭くえぐり出している。そして、*The Unnamable*の語り手はDescartesの打ち出した「コギト」という方法論を批判的に受け継ぎ、発展させているのだ。語り手の意識は、自己の絶対的存在基盤であるどころか、当の自意識自体が相対化され、「語る私」と「語っている私の声を聞いている私」の二つにハッキリと分かれている。そして両者の間には食い違いが起こり、そのズレは修正される事は無い。Descartesにとって絶対確実であるはずだった語りの主体は、もう無い。

4：亀裂

「語る私」と「語っている私の声を聞いている私」の二つに語り手である「私」が分裂するという事は、自分の声や言葉を話し、なおかつ聞いている語り手に、さらなる混乱をもたらす事になる。

(a) I shall transmit the words as received, by the ear, or roared through a trumpet into the arsehole, in all their purity, and in the same order, as far as possible. This infinitesimal lag, between arrival and departure, this trifling delay in evacuation, is all I have to worry about.

(*The Unnamable* 86)

(a) Tels reçus, par l'oreilles, ou hurlés dans l'annus, à travers un cornet, tells je les redonnerai, les mots, par la bouche, dans toute leur pureté, et dans même ordre, autant que possible. Cette infime hesitation, entre l'arrivée et départ, ce léger retard apporté à l'évacuation, j'en fais mon affaire, c'est tout ce que je peux faire.

(*L'innomable* 104)

(b) ...I am the absentee again... / ...me voilà l'absent, ...

(*The Unnamable* / *L'innomable* 177 / 210)

引用の（a）で明らかな様に、到着と出発、つまりこの場合は、「聞く事」と「語る事」の間には微妙な遅れがある。Descartesにおいては同時に行われる事が前提であったこれらの行為の間に入れられた「このほんのわずかの遅れ」によって、*The Unnamable*の語り手は聞く事と語る事を同時に行う事が不可能になっている。その結果、一貫した語りの主体は維持する事が出来なくなり、ずれて行く。*The Unnamable*の語り手にとって、「聞く事」とは、私が発しているはずの言葉を、ハッキリと自分の言葉として認識できないまま受け取る事であり、「語る事」とは、やはりどこか違和感のある言葉を聞いてそれをそのまま反復する事になってしまっている。同時性に亀裂が走り、確たる自己認識は失われる。

「語る事」も「聞く事」も、自己完結出来ない行為になっている一方で、これら二つの行為は、お互いがもう片方に依存してもいる。「語る事」も「聞く事」も、互いの行為無しにはあり得ない。もともと一人が一貫して行っていると仮定されていたこれらの行為は互いに独立も出来なければ、Descartesにおいてそうであった様な、一致も出来ない。「わずかの遅れ」によって、一致できないこれらの行為は、互いに必要とし合いながらも、互いの行為を認識する事無く、二つの行為は重なる事無くずれ続け、解体する。その結果、引用（b）

の様に、「自分はここにはいない」と言う事で、自分の存在を証明するという矛盾した状況が出現する事になる。実体や統一体としての「私」がいないのに、「私はいない」と語り手が語る事によって、逆に「私がいる」という事を証明してしまっているのだ。

Beckettは、何故この様に矛盾だらけの作品を書いたのだろうか？この問いについて答えるために、これまで*The Unnamable*を通じて見てきた事を踏まえつつ、今度はBeckett自身の言語観について迫ってみよう。

5：自分のものでないこの言葉

Beckettの作品、特に作品と言葉との関係を考える場合、アイルランドにおける言葉の果たす役割の特殊性を、まず念頭に置く必要がある。イギリスによるアイルランドの植民地支配は同時に英語によるゲール語の抑圧の歴史でもあった。Beckettの先輩に当たるJames Joyceの*A Portrait of the Artist as a Young Man*（1916）の主人公Stephen Dedalusはイギリス人の学監（“dean”）と話しながら次の様に考える：

> — The language in which we are speaking is his before it is mine. How different are the words *home, Christ, ale, master,* on his lips and on mine! I cannot speak or write these words without unrest of spirit. His language, so familiar and so foreign, will always be for me an acquired speech. I have not made or accepted its words. My voice holds them at bay. My soul frets in the shadow of his language.
>
> (*A Portrait of the Artist as a Young Man* 205)

「こんなにもなじみ深くそしてよそよそしい」（“so familiar and so strange”）英語が、日常的な話し言葉（“speech”）でありながら、同時に違和感を覚えざるを得ない言葉として述べられている。英語に対するこの様な矛盾する感情は、Stephenに限らず、Joyce、Beckettをはじめとするアイルランド出身の作家達が多かれ少なかれ共有している感情と言って良い。彼等アイルランド出身の作家達にとって英語で作品を書く事とは、こうした押し付けられた言葉に対する違和感に由来する不安定な状況を生きる事なのだ。

Terry Eagletonによれば、イギリスの植民地であるアイルランドは、イギリスで栄えたようなリアリズム小説が成立する条件である成熟したブルジョア市民社会の安定性と統合性を欠いていたものだった。しかし、写し取るべき現実が不安定で貧しく、統合性を欠く断片的なものであるが故に、十八世紀のJonathan SwiftやLaurence Sterne以来、現実を映すべき言葉の役割に敏感な作家や幻想作家を多く輩出してきた。そしてこうした特質を背景としてアイルランドは、十九世紀末からOscar WildeやWilliam Butler Yeats、George Bernard Shaw、Joyce、そしてBeckettといったモダニズムを代表する作家達を産み出し、イギリス本国以上に英語文学を活性化することになった。そして、特に言葉と現実のアイルランド的特質について、Eagletonは次の様に述べている：

> If reality is not disowned in Irish writing, then in a venerable tradition from Sterne to Beckett it is calculatedly banal, opening an ironic rift between its own meagreness and the self-consciously elaborate languages used to record it. This bathetic gap between form and content, of which *Ulysses* is the supreme modern example, is then among other things an index of the condition of the colonial writer, wryly conscious of the discrepancy between the exuberance of the signifier and the meanness of the referent.
>
> (*Heathcliff and the Great Hunger* 150)

Eagletonがこの引用箇所で述べている様に、Joyceはアイルランドという植民地の持つ特徴がモダニズムと直接結び付いた最高に華々しい実例と言えるだろう。Stephenが、押し付けられた言葉としての英語の他者性に由来する違和感や、英語を客観的対象物として冷静に分析する態度には、「現実それ自体の貧しさと、それを記録するために使われる」言葉の落差を背景とするアイルランドの伝統的事情があったのだ。

Beckettの場合は、状況はもう少し複雑だ。Beckettも、押し付けられた言葉としての英語に対する違和感というアイルランド出身の作家が持つ宿命を、Joyceと同様自分の作品の出発点にしていると考えて良い。しかし、その一方で、Beckettはイギリスからの移民の子孫として社会的優位な地位を保ってきたプロテスタント系でもある。つまり殖民する側の血が流れているのだ。さらに、Beckettは、英語とフランス語両方で作品を書くが、Beckettの父方の先祖

は十七世紀フランスの宗教戦争からイギリスに逃れてきたプロテスタント（ユグノー）だ。それゆえ、Beckettがフランス語で書くことは、一種の先祖返りという事になる。

自分の作品をほとんど常に自己翻訳してきたBeckettは、ほとんどの作品に英語・フランス語二つの版を残した。さらにBeckettはフランス語で書いたものを英語に訳したり、英語で先に書いたりする事で、フランス語の作家にも落ち着こうとはしなかった。

この様に二つの言葉の間を絶えず動き続けるBeckettの往復運動が作品にはどう反映されているのだろうか？*The Unnamable*の中に興味深い一文があるので、以下に見てみよう。

> And perhaps now again I shall do no more than seek my lesson, to the self-accompaniment of a tongue that is not mine.
>
> (*The Unnamable* 25)

> Peut-être que cette fois-ci encore je ne ferai que chercher ma leçon, sans povoir la dire, tout en m'accompagnant dans une langue qui n'est pas la mienne.
>
> (*L'innomable* 33)

*The Unnamable*の作者Beckettを、語り手と同一視する事は、非常に危険な事だが、この引用箇所の語り手の状況は、作者Beckettの状況に非常に近いと言える。引用部分のすぐ前で、語り手は「私の学課」（"my lesson"）について、かつて暗記したが、言いたくなかったものであると述べている。ちなみにフランス語版では「かつて良く知っていたが言いたくなかったもの」となっている。ここは、語り手自身がかつて習った語学の授業を指していると考えられる。つまり英語のことだ。この引用箇所に、押し付けられた英語に対する作者Beckettの不満の声を重ねて解釈することは十分可能だ。しかし、この作品はBeckett自身の手によって、もう一度英語に翻訳されている。英語から逃れる事が目的ならば、あえてわざわざ自分で翻訳する必要性は無い。しかしBeckettは翻訳した。その結果、*The Unnamable*と*L'innomable*という二つの作品が出来上がる事になる。

Beckettの行う自己翻訳は、基本的には逐語訳だ。一字一句丁寧に訳されて

いる。しかし、それでも全体が完全に一致する事はない。前章の引用箇所で、*The Unnamable*の語り手が述べていた様な状況をまさにBeckettは自己翻訳を通じて経験している。まず、始めにフランス語版の*L'innomable*があった。このテクストを元に、Beckettは「出来る限り」(“as far as possible”)「受け止めたまま」(“as received”)「正確に、同じ順序で」(“in all their purity and in the same order”) フランス語を英語に「移し変え」(“transmit”) ようとする。しかし、そこには「わずか」(“infinitesimal”) で「取るに足らない」(“trifling”) 違いが存在してしまう。その結果出来上がった*The Unnamable* / *L'innomable*は、双方のテクストに現れる微妙な違いが原因で、一致しない。しかし、両者は全然違うものでもない。それにもかかわらず、*L'innomable*というフランス語版のテクストは*The Unnamable*という英語版のテクストに対してオリジナリティーを主張出来ない。なぜならフランス語版には無い言葉が英語版には書き込まれているのだ。同様の理由で、英語版はフランス語版の単純なコピーでもあり得ない。『名づけえぬもの』という作品は、*L'innomable*であり*The Unnamable*でもあるのだが、同時に英語版にはフランス語版の、そしてフランス語版には英語版の声が背後に響いている。読者は、英語版を、フランス語版がある事を前提として読み、フランス語版を英語版がある事を前提にして読まなければならない。読者は一冊の本を読んでいるのに、その本のページは全て、英語とフランス語の、完全には決して一致しない内容の二枚の紙で構成されているのだ。

英語とフランス語の間を、定住する事無く、常に行ったり来たりしているBeckettにとって、英語もフランス語も、まさに自分が使っている言葉でありながら、先の引用で語り手が述べている様な「自分のものでない言葉」になっている。Beckettは英語とフランス語という二つの言葉の間を生きる事でどちらの言葉にも定住する事なく、どちらの言葉からも、「取るに足らない」程「わずか」にだけ、ずれた場所に居続けたのだった。

結論

*The Unnamable*の語り手は本来一人であるのに、「語る事」と「聞く事」の間には「わずか」で「取るに足らない」遅れ＝ズレがあり、二つの行為は同時に一致する事は不可能であった。一致できないこれらの行為は、互いを必要としながらも、二つの行為は重なる事無く、ずれ続け、安定した語りの主体は実

体が希薄になり、崩壊した。言葉でもって言葉の機能が崩壊して行く状況が、*The Unnamable*では描かれているのだ。これと似た状況が、英語・フランス語両方のテクストの間でも認められる。英語もフランス語も、*The Unnamable*の語り手の状況と同じ様に、相対化され、お互いに別の言葉でありながら、お互いの存在が前提となって書かれている。つまり、自己翻訳を前提として一方の言葉で書くという事は、英語なら英語を、フランス語ならフランス語を使う事によって、その言葉の実体性が単語レベルで弱められるという事になるのだ。言葉を執拗に使いつづけながら、言葉の役割や実体性を言葉から奪い去る事、この様な困難な試みは、同時に言葉に異様にこだわる事とも同じになる。すなわち誰よりも言葉の違和感にこだわり、攻撃を続けたBecketttこそ、実は誰よりも言葉を愛していたと言えるのだ。

Notes

1 本論は2004年12月４日に立教大学で行われた立教英米文学会にて口頭発表した原稿を元にして、論文に書き改めてある。また、Beckettの作品で本論中に日本語に訳してある部分は英語版に基づいて、全て筆者が行ったものとする。それ以外の場合は全て注もしくは本文中にその旨記してある。

2 全ての研究書を挙げるのはとうてい無理なので、ここではJames Knowlsonが書いたBeckettの伝記*Damned to Fame*のみを挙げるにとどめておく。この本の中でKnowlsonは、この時期が最も実り多き時期であると評し、この時期を扱った章の表題を、Beckett自身の表現を使って、"A Frenzy of Writing"としている（*Damned to Fame* 324-5）。

3 本論で取り上げる*The Unnamable* / *L'innomable*のテクストは、それぞれ英語版は*The Unnamable*（New York : Grove Press, 1958）、フランス語は*L'innomable*（Paris : Les Éditions de Minuit, 1953）に依っている。 尚、本論引用箇所の下線強調部分は、全て筆者の手によるものとする。

4 これらの名前は全て、*The Unnamable*以前の作品の登場人物の名前であり、この時点で、語り手と作家Beckettを同一視する事は可能だ。しかし、語り手と作家との類似に固執する事は、ここでは敢えてしない。語り手と作家の関係は後で詳しく検討する事にする。

5 ある時には壺と述べられる語り手を囲っている壁は、またある時には言葉である場合もあるのだから、必ずしもHugh Kennerの指摘は当てはまるという訳ではない。しかし、Hugh Kennerの指摘に合致する場合がある事も確かだ。*The Unnamable*の語り手は、自分が入っている壺の中にいる限りは自分を基準として内側・外側の区別をハッキリと付ける事が出来るので、とても安心すると述べている。そして、物事の判断を下す場合にもこの壺の中にいる時が一番うまく行くとも述べている（*The Unnamable* / *L'innomable*　77－8 / 94－5）。

6 Ruby Cohnは、フランス語のタイトル*L'innomable*は、「名前が付けられない者」以外に「言うのもはばかられる程下劣な者」(unspeakably vile)、「人をうんざりさせる者」(disgusting)の意味がある事を指摘している（*A Beckett Canon*）。どちらの別名も作品の内容を言い当てている点が非常に興味深い。もちろん、Beckettはこの作品を初めにフランス語で書いたのだから、以上のような意味も含ませて書いていたのかもしれない。

7 参考として、以下に英訳版を引用する：

So that, after having thought carefully about it, and having scrupulously examined everything, one must then, in conclusion, take as assured that the proposition : *I am, I exist*, is necessarily true, every time I express it or conceive of it in my mind.

（*Discourse on Method and The Meditations* 103）

8 Joyceと言葉、政治や国家は、簡単に説明出来るものでもない。Joyceは『フィネガ

ンズウェイク』を通じて、英語にあらゆる外国語を融合した。その結果、彼は単にイギリス人の言葉としての英語を超えて、他のどんなモダニスト作家にもまして純粋に言葉そのものを問題にする地平に出た。文字通り、Joyceは言葉を「押し広げた」のだった。そして、その結果、あらゆるナショナリズムをも超越したとも言える。Joyceにとって英語とは、基盤になる国語では無く、全ての国語、意識・無意識へと拡がって行くためのフィルターだったのかもしれない。

Works Cited

Beckett, Samuel. *The Unnamable.* New York : Grove Press, 1958.

–. *L'innomable.* Paris : Les Éditions de Minuit, 1953.

Cohn, Ruby. *A Beckett Canon.* Ann Arbor : The U of Michigan P, 2001.

Descartes, René. *Discours de la méthode.* Paris : Le livre de poche, 2000.

–. *Méditations métaphysiques.* Paris : GF Flammarion, 1992.

–. *Discourse on Method and The Meditations.* Tr. by F.E. Sutcliffe. London : Penguin, 1968.

Eagleton, Terry. *Heathcliff and the Great Hunger : Studies in Irish Culture.* London : Verso, 1995.

Graver, Lawrence, and Raymond Federman, eds. *Samuel Beckett : The Critical Heritage.* London : Routledge and Kegan Paul, 1979.

Joyce, James. *A Portrait of the Artist as a Young Man.* London : Penguin, 1992.

Katz, Daniel. *Saying I No More : Subjectivity and Consciousness in the Prose of Samuel Beckett.* Illinois : Northwestern UP, 1999.

Kenner, Hugh. *Samuel Beckett : A Critical Study.* Berkeley : U of California P, 1968.

Knowlson, James. *Damned to Fame : The Life of Samuel Beckett.* New York : Touchstone, 1996.

Lodge, David. *The Art of Fiction.* London : Penguin, 1992.

"a tongue that is not mine"
A Study of Samuel Beckett's *The Unnamable / L'innomable*

Taro Ishikawa

One of the most basic questions raised by Samuel Beckett's *The Unnamable / L'innomable*, is quite simply that of the identity crisis or the origin and authority of the narratives we are given to read, and the language in which we are given to read them. This problem is the explicit theme of the work in which the first-person narrator repeatedly disavows and rejects responsibility for the utterance he presents. The relationship between origin, source, reference and the "voice" that the narrator speaks but always disavows is important to the structure of the work because the first-person disavowals of utterance are balanced by a great number of assertions of direct literality that can be used to oppose the "voice" of the narrator to the third-person personae represented by Beckett's earlier novels. Gradually the narrator breaks from the figural personae of the earlier novels and their imposed or false proper names because the narrator refuses the false stability of reference offered by the proper names. Unable to draw clear distinctions between who is speaking and who is being spoken of, the narrator cannot even refer himself through the use of a pronoun. But at the same time, the narrator lurks behind any utterance. If we could somehow locate and definitively delimit some sort of character, essence, or voice in the work, there would be nothing to stop us from calling it, paradoxically, "The Unnamable," or anything we wanted, for example, Molloy, Murphy, or Malone who are all characters of the earlier novels. This paradoxical situation pervades the text.

For the narrator, as for Descartes, consciousness, subjectivity, and existence are intimately tied to the temporality of language and prepositional statements. For example, the validity of the proposition that "I am, I exist," holds only at the moment that it is being said and thought simultaneously. We prove our existence not only by thinking, but also by being able to think "I think," that is, by thinking in a movement of linguistic temporality. We think. We think, "I

think," and we know that we are. Then, consciousness and stable subjectivity consist of speaking, of producing language. That results in an act of thinking at the moment in which not only speaking but also hearing one speak are enacted. The linkage of thinking, consciousness, existence, and hearing is made repeatedly throughout the text.

But thinking or speaking and hearing can never achieve together the moment of simultaneity because there are always "infinitesimal lag" and "trifling delay" between those acts. Every time the narrator can not delimit himself, there is always a difference between speaking and hearing one speak. So, on the one hand, the narrator who claim his own inexistence invalidates his statement simply by making it. On the other, it is the very inexistence of the narrator as totality, as fixed subject, as namable, which forces his continual articulation as pronoun. If stable subject is impossible for the narrator, no less impossible its elimination.

Beckett began to translate his works after the World War II. His turn to French resulted in requiring to become his own translator. Beckett found himself no longer able simply to separate himself from his works after their completion but continued to work with them and against them in various ways. Though extremely faithful to his texts, Beckett was capable of introducing changes where necessary. Allowing for a different form of self-reflexivity, Beckett's self-translation lead to self-possession and self-loss in his works. Having to translate his own words as though they were the words of another alienated himself from himself that the words brought about. As a result, English and French texts can never coincide. There are always "infinitesimal" and "trifling" differences in both texts which were originally written in one language and by one author, Samuel Beckett. Thus, Beckett put himself in the oscillation of the two languages each of which always necessitates its own invalidation by the other and which can never achieve the moment of coincidence. While writing his own work, Beckett actually lived in the same conditions as the narrator in *The Unnamable / L'innomable*.